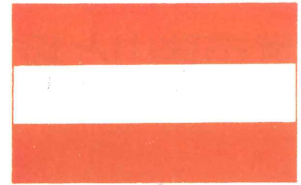


飛 騰

平成6年2月
第8号



海援隊旗

回 顧 1993年

館長 小 椋 克 己

昨年11月で満二年、お陰様で、全国から33万人をお迎えすることができました。開館当時とは逆に7割が県外、若い方の割合もぐっと増えたのが昨年の特長です。

昨年の出来事から二つ。

5月27日、展示品の「純金カツオ」が盗まれました。大変お恥ずかしいことですが、この事件はテレビや活字で全国に知れ渡り、記念館を有名(?)にしてしまいました。事件は未解決で残念ですが、逆手に取って開き直るしかない気を引き締めています。

9月15日、入館者30万人目を記録。西宮市の播本昌直さんという28歳の青年でした。「親から展示品も景色も良かったと聞いていたので、必ず行ってみようと思っていました。いい思い出になりました」という彼のコメントを新聞で読んで、私は、活字が滲んでいくような気がし

ました。最高の「ロコミ」です。

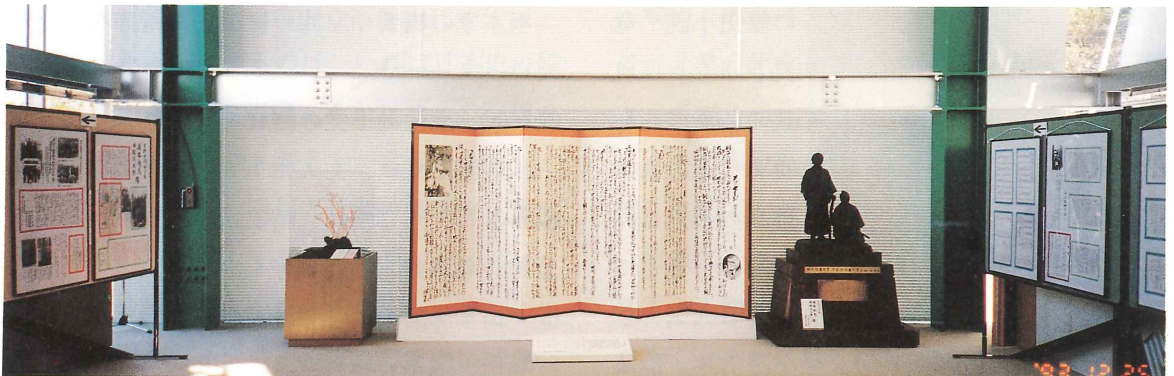
ところで、皆様から沢山の展示品を頂いたのも昨年の大きい思い出です。

10月24日、岐阜県関市の関商工会議所青年部が、募金で記念館を建設した高知の青年グループの努力を讃えるエールとして「関の孫六の刀」を寄贈して下さいました。

11月1日、昭和3年、浄財を集め桂浜に龍馬の銅像を建立したリーダー、91歳でご壮健な入交好保さんが「『銅像の龍馬さん』を讀めた作家司馬遼太郎さんのメッセージ」を、縦1.8メートル、横4.8メートルの六曲屏風に揮毫し、ご自身が来館して寄贈して下さいました。

11月15日、サントリー(株)四国支店が「龍馬ラベルのウイスキー」の売り上げ金の一部で「山内容堂らの書軸6点」を購入しご寄贈下さったことなど、多くの方々のご好意が形になって表れました。本当にありがたいことです。

さて、平成六年度にかけては、館を盛り立てて下さる方々の絆を強める組織づくりも、具体化してくる筈です。どうぞご期待を。



「武市瑞山と坂本龍馬」展

学芸専門員 下元正清

主催・高知県立坂本龍馬記念館
期間・平成6年3月20日～5月5日

1. はじめに

武市瑞山（通称半平太）は文武両道に優れ、眉目秀麗、謹厳実直の人物であった。また勤王の志厚く、藩主に対して誠忠であった。土佐の青年下級武士の尊敬と信頼を一身に集め、彼等の集団「土佐勤王党」の盟主に推された。

武市家と龍馬の坂本家は親戚の間柄で、2人は子どもの頃から親交があったと思われる。

瑞山は一藩勤王の思想を堅持し、かたくななまでに山内容堂に誠忠を尽すが、瑞山のいき方に飽き足らない吉村虎太郎や龍馬は、文久2年3月相次いで脱藩し、国事に奔走するようになる。

容堂にとって瑞山は苦手の人物で、彼は瑞山の思想や行動を基本的に認めず、慶応元年閏5



▲ 横浪黒潮ライン沿いにある武市瑞山像

月、土佐勤王党の獄で切腹を命じた。

司馬遼太郎氏の歴史小説「竜馬がゆく」は現代の若者の心を捉え、その為に龍馬の人気は高まった。そして単なる人気にとどまらず、龍馬

の生き方を自分の軌範にしている若者も少なくない。

それに反して、謹厳実直な瑞山の人気は、地元高知は別として、全国的には今一つである。

この企画展では、ともすれば龍馬の陰に隠れて姿を見せない瑞山を表に出し、瑞山と龍馬の交流や行動を紹介するとともに、二人の性格や思想等を明らかにしたいと願っている。

2. 1階北ホールの展示

正面に91歳の入交好保氏の揮毫した「司馬遼太郎のメッセージ屏風」（6曲）があり、その左右に、ミッドウェー島近海から採取したサンゴと、京都円山公園の「坂本龍馬・中岡慎太郎像」の原形像を配している。

特にこの屏風には、司馬、入交両氏の龍馬への熱い想いが満ち溢れており、読み進むうちに誰しも共感を抱かずにはいられない。

さらにそれらの両翼には、16枚の自作パネルが並んでいる。

そのパネルの内容は……。

① 瑞山の生家

瑞山の生家は、高知市池、吹井に現存する。

ここでは、武市家の概要や家族の様子、墓所等を紹介する。

② 龍馬の生家

龍馬は高知城下本丁筋一丁目で生まれたが、現在はその家はなく、跡に碑が建っている。

坂本家の概要や家族の様子、墓所等を紹介したい。

③・④ 土佐勤王党の結成

土佐勤王党は、文久元年8月江戸において結成された。ここでは、結成に至るまでの経過や、盟約の趣意書、加盟者等を出したい。

⑤ 山本琢磨の懐中時計着服事件

瑞山、龍馬、琢磨の3人は親戚の間柄で、奇

しくも同時期、江戸で剣術の修行をしていたことがあった。

ある時、琢磨が商人の落とした時計を着服する事件が起きたため、瑞山と龍馬は相談して時計を商人に返し、琢磨を江戸から逃がした。

琢磨はその後函館に渡り、沢辺と名乗り、ロシア正教の司祭になるなど、数奇な人生を送ったのである。

⑥・⑦ 龍馬脱藩

文久2年3月24日の夜、龍馬は沢村惣之丞と共に脱藩する。龍馬がこの日に脱藩することを知っていたのは、瑞山はじめ一部の同志だけだった。瑞山は龍馬に一篇の詩を餞けとして贈り、河野万寿弥に命じて朝倉まで見送らせた。

ここに龍馬の人生が大きく転換する。

なお姉栄は、龍馬に刀を与えて脱藩を援けた後、自刃した。

⑧ 吉田東洋暗殺事件

執政吉田東洋は、文久2年4月8日の夜、那須信吾ら土佐勤王党の3人に斬殺された。

ここでは、この事件の概要や原因、事件のもたらした影響等に触れる。

⑨・⑩ 瑞山、龍馬と岡田以蔵

NHKアニメ「おーい竜馬」の影響だろうか、若者の間に岡田以蔵の人気は思いの外高い。それは、アニメで出て来た以蔵のアウトロー的行動、個性的マスクが、現代の若者に受けたのだろうか。

以蔵が登場してくるのは、いわば日本史の陰の部分で、「人斬り以蔵」として数々の暗殺を行い、佐幕派の人物を震え上がらせた。

ここでは、瑞山、龍馬と以蔵の関係を、多面的に捉えてみたい。

⑪ 瑞山の最も華やかな時代

京都土佐藩邸の他藩応接役としての活動や、

柳川左門と称して勅使の東下に随行した時の様子等を紹介する。

⑫・⑬ 土佐勤王党の弾圧

文久3年8月18日の政変を機に、容堂は土佐勤王党の弾圧に踏み切った。

当時の国内情勢をふまえ、瑞山入牢の原因や切腹の宣告、加盟者の相次ぐ脱藩、野根山屯集



▲ 平井収二郎の墓

事件等を取り上げたい。

⑭ 瑞山や龍馬の思想に影響を与えた人々

瑞山——鹿持雅澄、久坂玄瑞（吉田松陰）、龍馬——河田小龍、勝海舟、大久保一翁
横井小楠

⑮・⑯ 瑞山と龍馬の年譜

3. 地下2階資料展示室の展示

瑞山の獄中自画像、龍馬の書簡や肖像画、血染めの掛軸、伊藤博文の書軸、その他幕末維新期に活躍した人物の書軸や和歌短冊、第27代兼元刀匠金子孫六の鍛えた「関の孫六」、絵「いろは丸」等を展示する。

4. 結び

瑞山と龍馬は、近代日本の夜明けを待たずして、非業の死をとげた。2人の死は、我が国にとって測り知れない損失であったが、後に続く人々が2人の志を継承し、近代日本の創設に貢献した。

冒頭にも述べたように、今回の企画展では、2人の人間性や生き方を明らかにすることができたら、それに越した喜びはないと考える。

「坂本龍馬脱藩の道」をゆく

龍馬研究会 坂本 美津子

文久2年（1862年）3月24日夜、龍馬は、先に脱藩し、ひそかに帰藩した沢村惣之丞の手引きで土佐を脱藩した。

佐川町から朽木峠を越え、葉山村に入り、布施ヶ坂の難所を越え、東津野村を通り、翌25日、高知より85km、梶原町的那須俊平、信吾親子の家で、土佐最後の夜を過ごした。

26日、那須親子の案内で、宮野々番所を抜け、茶や谷、松ヶ峠番所を経て、昼頃、藩境葦ヶ峠で土佐に別れを告げ、（信吾はここで引き返している。）伊予へ入り、野村町の小屋、榎ヶ峠を通り、河辺村の封事ヶ峠、水ヶ峠を越え、尾根を走り、梶原より40kmの泉ヶ峠で、脱藩第一夜を迎えている。

27日、7km下った宿間から川船に乗り、（俊平は2人を見送って、引き返した。）大洲で昼食をとり、夕刻、終点長浜に着き、富屋金兵衛邸に泊まり、翌日長浜から船で、上関を目指し、4月1日、目的地下関に到着した。



泉ヶ峠

この脱藩ルートは、龍馬の長姉千鶴の夫、高松順蔵が、沢村惣之丞（変名関雄之助）の脱藩行程を書き取った「覚、関雄之助口供之事」という古文書の写しをもとに、5年前、大洲市の

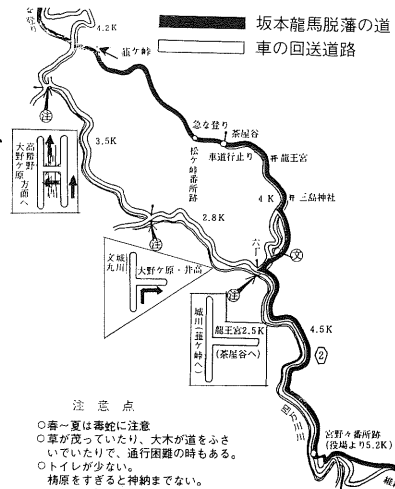
歴史研究家、村上恒夫氏が解明し、著書「坂本龍馬脱藩の道を探る」で発表された。

多くの龍馬ファンは、最初に龍馬と出会うのは、司馬遼太郎氏の「竜馬がゆく」であるという。私も学生時代に「竜馬がゆく」を読んで、龍馬ファンになった1人である。文庫本全八巻の長い小説の中で、脱藩のくだりはわずか2ページ半。資料がないため、脱藩ルートが確定出来ず、省略せざるを得なかったのであろうが、どこを通過して脱藩して行ったかは、龍馬暗殺が誰であるかと同じ位、重大な関心事であった。

平成2年11月、「龍馬まつり龍馬追跡ツアー脱藩コース」に参加して、12kmと短区間であったが、長年の念願が叶って、脱藩の道を歩く事が出来て感激した。その後、もう一度歩きたい。他の区間も歩いてみたいと思ったが、資料、地図の類がなくて断念した。龍馬研究会事務所にも、脱藩の道を歩きたいという問い合わせの電話や、来訪者が多くなり、実際に歩いて道に迷ったという声や、県外龍馬会の脱藩ツアーの計画を聞き、案内図作成を思いついた。

高知を起点に、車で行く場合が多いので、回送路と脱藩路の距離と、所要時間の調査が必要である。最初は村上氏にお願いして、両方の道を覚える事から始めた。何度も道に迷ったり、通行不能で引き返したり、容易ではなかったが、半年を費やして完成した。

梶原から宿間迄50kmの案内図と、高知発日帰りから2泊3日迄の4つのモデ

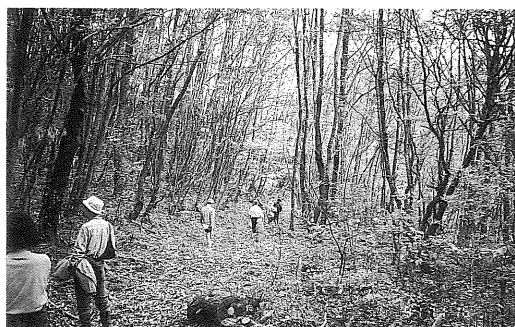


注意点
○春～夏は毒蛇に注意
○草が茂っていたり、大木が道をふさいでいたりして、通行困難の時もある。
○トイレが少ない。
○梶原をすぎると神納までない。

ルコースを設定している。（坂本龍馬記念館にも展示していただいているが、作成後2年が過ぎていたので通行不能区間が可能になったりと、一部変化しているの、手直しの必要を感じている。）

高知から長浜迄170kmの内、梶原迄は、佐川町から葉山村に抜ける朽木峠越えの旧街道が整備されているが、大部分はアスファルトの国道を歩かなければならない。梶原町から宿間迄の2県4町村にまたがる50kmは、旧街道が整備され、標識、案内板が設置され、通行可能になっている。

伊予路で15kmと一番長い区間を占める河辺村では、いち早く全村あげて、脱藩の道保存に取り組み、毎年9月初めに「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」というイベントを開催し、県外の龍馬ファンをはじめ、毎回200人を越す参加者にぎわっている。



榎ヶ峠

梶原町では、龍馬の脱藩ルートは、一足先に脱藩した吉村虎太郎と同じく、九十九曲峠説が定説となっていた。村上氏の葦ヶ峠説が発表されてから、一年の調査の結果、資料が信憑性が高い事や、「茶や谷の松ヶ峠番所を通った」という伝承がある事などから、葦ヶ峠説を支持し、現在では、葦ヶ峠に通ずる通行不能であった旧街道も整備され、町内の要所には、詳細な地図案内板が設置され、脱藩の道には、曲がり角ごとに、矢印の標識が立っていて、迷う事なく通

行出来る。

来年11月15日には、高台の城跡に、龍馬の脱藩案内をした那須俊平、信吾親子や、吉村虎太郎らの梶原町出身の六志士と、龍馬、惣之丞の銅像が建立されるそうである。



茶や谷

脱藩の日、3月24日前後の日曜日には、葉山村の朽木峠越えや、高知市和霊神社の脱藩祭、梶原町の脱藩の道ウォークと、各地でイベントが多い。今年は県の観光振興課の主催で、これらを一本化した脱藩ツアーが開催されるそうである。

長崎、京都、高知、下関等全国の龍馬ファンが、それぞれの胸に抱いている龍馬に逢うために、足跡を追って訪れる場所は多い。しかし、現存する建物や、往時を偲ぶ事の出来る風景に出逢う事は少ない。

脱藩の道にはまさしく、龍馬の足跡が残り、132年前、龍馬が仰いだ四国連山の山なみが広がり、静寂の中に、龍馬の息づかいと足音が聞こえてくるほど、龍馬を身近に感じさせてくれる。

龍馬も、惣之丞も、那須親子も、脱藩した多くの志士達は、維新の夜明けを見る事なく、異郷で非業の死をとげている。脱藩の道を歩く時、誰もが彼らに思いをはせ、平和の重みと、次代へ受けつぐ使命感と、自分自身の生き方を見つめ直すのではないだろうか。

おかの陸の上の船

解説補助員 田所菜穂子

坂本龍馬記念館の形は船のイメージである。龍馬の船が、目の前に広がる太平洋に、空に、今まさに乗り出そうとする瞬間だ。

当館もオープンから三年目にはいった。オープン当初、展示物が貧弱で、お客様から「何もない」とのおしかりの声をどれだけいただいたことか。はては高知の恥とまで言われもした。平身低頭おわびするのみでつらかった。それがこの二年で、複製品中心ではあるがかなりの物が入り、「本物がなくてがっかり」との声はあるが、以前程不満を聞かなくなった。が、しかし。当館のコンセプトは「龍馬の精神を展示する」で、新しい形の記念館をめざしたのでは？その点では未だこれからだ。脱藩をした龍馬。役人なんて面倒なものにはならず、世界の海援隊をやると言った龍馬。良いと思えば何でも受け入れた龍馬。その精神から言えば、いわゆるお役所主義は全く相いれない。〈県立〉ということが前例主義や形式主義の悪い意味で働いて、館の活動をしばってはいけないと思う。県立とは〈みんなの物〉、という視点に立って欲しい。そして、過去を偲ぶ物の充実を図るだけでなく、未来への夢や希望を語り合う場、何かを始める場、人を育てる場、そのための企画イベントの拠点となるような方向をめざし、県も館も取り組んでほしい。利用者の皆さんの提案もほしい。でないと、この船は陸にあがったまま、いつまでも出港できず錆びついてしまう。龍馬に過去は似合わない。彼は常に先の世界を考えていた。未来を探す船となることこそ、龍馬の精神を記念することになる。当館のスタートはこれからだ。

親しまれる龍馬記念館に

解説補助員 中山ゆか

当館では、もう30万人を超すお客様にご来館いただきました。私達は受付にいて、直接お会いしたことになるわけですから、今さらながら驚きです。

このようにたくさんのお客様をお迎えしていて最近気付いたことは、ゆっくり時間をかけて見ていかれる若いお客様が増えてきたことです。カップルや学生さんのグループで2、3時間程繰り返し見て回る方や、展示物とにらめっこで熱心にメモを取られる方。図書閲覧コーナーの本を卒論の資料として活用される学生さんもいらしたようです。ある方にお尋ねしたら、「もう10回以上来ています。学芸員の方に卒論のアドバイスをしてもらったけれど、覚えてくれていたのだろうか」と話して下さいました。

また先日は、30万人目のお客様のHさんが西宮市から再びお立ち寄りになりました。

昨年の終り、一人の若い女性から、ご自分の本を館に寄贈したいとお申し出があり、百冊近い幕末関係の内容の書籍が送られてきました。その方は、「3度目の来館ですが、2年間でこれだけ育ったという感じで安心しました」と寄せ書きしておられました。

こんなふうに館の成長を暖かい目で見守って下さり、親しみを感じて下さるお客様がいらっしゃることは、私達にとってかけがえのない財産です。

これからも、龍馬に対する様々な想いを持ってご来館下さるお客様に、ますます親しんでいただけるように、心のこもった応対を心掛けていきたいと思ひます。

新しい資料や図書の紹介

- 坂本龍馬脱藩の道図 (寄贈)
平成5・9・29 香川県 城井啓伍氏
- 日本刀「関の孫六」 (寄贈)
5・10・24 関商工会議所青年部
高知商工会議所青年部
- 絵画「いろは丸」 (寄託)
5・11・13 愛媛県 村上恒夫氏
- 司馬遼太郎のメッセージ屏風 (寄贈)
5・11・1 南国市 入交好保氏
- 三条実万書
- 安積良斎書
- 山内容堂書 (寄贈)
- 松平春嶽和歌短冊 平成5・11・15
- 渡辺 昇書(一) サントリー株式会社
- " (二) 四国支店
- 山内容堂書
- 寒泊一灯客衣深 脂書認止又沈吟
- 海南消息向誰訪 遙憶先生憂国心
- 寄吉田某 武陵罪人
- 有栖川宮幟仁親王和歌短冊
- 伊藤博文書
- 岩倉具視和歌短冊 掛軸
- 山内豊雍 "
- 尾池春水 " (購入)
- 楠瀬清陰 " 平成5・12・7
- 三条実万 " 京都・思文閣より
- 土方久元書
- 高島秋帆書
- 吉井勇和歌短冊
- 渡辺 清和歌短冊
- 渡辺 昇 " (寄託)
- 5・12・13 愛媛県 郷田智成氏

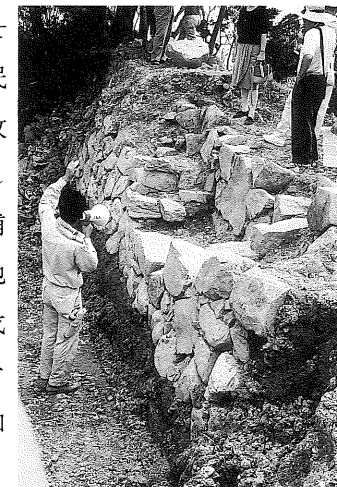
○図書 (9月1日以降12月23日まで)

購入・寄贈の図書は、全部で163冊。

東京都の土方かほる氏より「土佐勤王志士遺墨集」、平尾道雄著「武市瑞山と土佐勤王党」など105冊が寄贈された。また、福井市立郷土歴史博物館より、同館発行の「松平春嶽公未公刊書簡集」「慶永名臣献言録」など5冊が寄贈された。

浦戸城の石垣その後

先号でお知らせしたように、国民宿舎「桂浜荘」改築現場から出現した長宗我部氏の浦戸城の石垣は、地元の石垣保存期成同盟などの熱心な運動により、高知市教委は英断をも



って石垣の完全保存を決定した。そのため「桂浜荘」の改築計画も若干変更し、現在、工事が再開している。

石垣の保存方法については、今後検討されようが、郷土の歴史を知るうえに、貴重な文化財が残ったことは、すばらしいことだ。

入館状況

平成6・1・11現在 (開館以来787日)	
○総入館者数	337,748人
○最多入館	平成5・5・3 3,700人
○最少入館	" 5・12・21 32人
○本年度最多入館	" 5・5・3 3,700人
○本年度最少入館	" 5・12・21 32人
○本年度1日平均入館者数	446人



拜啓 龍馬殿

- 現在の日本の政治及び経済は、どこか間違っていると思います。龍馬先生の目指した、日本像と言うものは、こんなものではなかったはず。これからどうかこの日本国を見捨てることなく、見守っててください。

(11月3日 大阪市 J・J 男性)

- 龍馬はとても強いですね。龍馬がすきで何度も高知に来ています。わたしは龍馬が大すきで、かつらはまにも何度もいっています。かつらはまをながめると、「今、よみがえったらいいな」と思います。こうさくでもりょうまを作っています。

(11月13日 徳島県 池田知枝美)

- 昨日、理容師のメッセージに関東甲信越代表として初めてこの高知にきました。メッセージでは優勝をねらっていたのですが、3位にも入れず、いま疲れがどっと出ているところです。が、桂浜であなたにお会いしました。太平洋をながめる雄姿を拝見し、また新たな闘志が湧いてきました。——中略——

私は「決して後悔しないこと」というモットーで生きてきました。これからもこのモットーを通していきます。またいつか会いにきます。それまでさようなら。

(11月16日 東京都 Y・T 女性)

- 私は今日まであなたについては混迷の幕末時代にいち早く世界を展望して活躍し、若くして兇刃にたおれ非業の死を遂げた志士というくらいしか認識がありませんでしたが、本日この記念館を訪ねて、あなたの生い立ちや生きざまの数々を知ってびっくり致しました。

まさに壮絶なる人生を台風の如く駆け抜けていったあなたがもう二十年長生きしていたらこの日本はどんなに変わっていたらどうかと考えてしまいました。今日は本当によい勉強をさせて頂いて心より感謝致しております。

(10月24日 岐阜県 K・M 男性)

- 3回目の来館です。開館時に来た時は、新しすぎて、まだまだ資料もまばらでどうなる事かと思いましたが、2年で「これだけ育った」という感じでホッとしました。ミュージアムはいつでも古くて新しくなければいけないと思いますので、がんばって欲しいと思っています。

(11月24日 東京都 H・K 女性)

題字「飛騰」について

文久元年(1861)10月11日、龍馬は剣術修行のため、1か月の国暇を得て、讃岐丸亀の矢野市之丞の道場へ旅立った。この日、樋口真吉は、日記に「坂龍飛騰」と記した。

龍馬は更に国暇延長の許可をもらい、極秘裡に長州へ赴いた。彼は武市半平太の久坂玄瑞宛親書を携えていたのである。

長州萩に着いた龍馬は、久坂玄瑞を訪れて半平太の親書を手渡し、国事について会談する。

今まで一介の武芸者に過ぎなかった龍馬が、この旅を機に勤王の志士へと脱皮していくのである。矢野市之丞の所へ行つた目的を予め知っていた樋口真吉は、龍馬への期待をこめて「坂龍飛騰」と記したのであろう。翌2年3月、龍馬は脱藩する。(下元書)

館だより “飛騰” 第8号

平成6年(1994)2月1日発行

発行所 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-02 高知市浦戸城山830

Tel (0888) 41-0001